

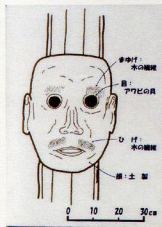
釜神様

釜神様は、かつてカマドの近くの柱や壁に祭っていたカマドを守る神様です。素材は土製や木製などつくられており、一般的に恐ろしい表情をした面です。

宮城県の中・北部から岩手県南部（旧仙台藩）にかけて多く見られましたが、近年家の新築により変わってきています。

市内では、銘熊の番健氏から市に寄贈された釜神様が唯一現存しているだけです。

この釜神様は、カマドの近くの柱であるよめかくし柱に祀られていたもので、目はアワビの貝、まゆげ・ひげは木の繊維をつかった土製のものです。



I-11-②

I-11-①

飯塚洞口家住宅（大同屋敷）

名取平野には、大同年（806～809）より住み着いていると言われている屋敷（通称：大同屋敷）が4つあります。

その中の1つが飯塚洞口家住宅のことで、屋敷回りに堀をめぐらし、おおよそ1,500坪を敷地を有しています。母屋（母屋）は、平面が田の字型の四間取りになっているいわゆる名取型と呼ばれている名取一帯に古くからみられる特徴的な間取りで、土間に太い柱が数本立っており、座敷（茶の間）と土間の間仕切りがありません。屋根は、茅葺の茅葺で基礎は石場礎です。

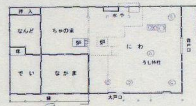
建築年代ははっきりしませんが形式、間取り構造等から少なくとも200数十年以上は遡ると見られます。母屋は昭和25年に取り壊されてしまいました。



I-12-②

I-12-①

飯塚洞口家住宅（大同屋敷）平面図



I-12-③